



TITLE:

北米旅行記(8)

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 北米旅行記(8). 天界 1934, 14(158): 313-317

ISSUE DATE:

1934-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165530>

RIGHT:

## 北 米 旅 行 記 (8)

## 山 本 一 清

## ( 34 )

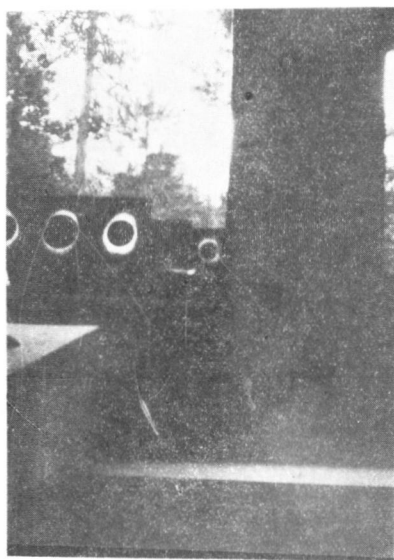
1933年7月18日、シカゴから走り続けた汽車が、朝 9時頃、アリゾナの沙漠を過ぎ、Canyon Diablo の橋を渡つて間もなく、車の窓から 南方を眺めてみると、ほゞ豫期したあたりに有名な Meteor Crater のプロフィルが地平線に見えた。世界最大にして、唯一の此の大隕星坑は、わざわざ 下車して見に行く価値あるものであるけれど、以前の時も、こんども、急ぐ 旅のため、どうすることも出来ず、殆んど諦めてゐたのだが、念願が通つたものか! 車窓から遠望し得たのは嬉しかつた。詳しいことは寫眞や エハガキで御免を蒙るとして、わづか三四分間の眺めを惜しみつい、見送つた。

## ( 35 )

朝10時50分、右の窓に San Francisco の高峰が見え始めたと思ふと間もなく、汽車は Flagstaff 驛に着いた。直ちに下車、二三步あるき出した時、氣品ある一青年紳士が “Dr. Yamamoto ですか?” と、近づいて來た。言ふまでもなく、かねて電報してあつた Lowell 天文臺の一臺員 P 氏であつたので、好意を謝しつい、車にのせられて、町の郊外にある「火星丘」上に連れて行かれる。十年前、カリフォニヤから東行の途中に此所へ下車した時には、此の町はまだ全くの田舎町で、停車場のあたりには服の汚れた 労働者やゴロツキ連がうろつき、英子を恐れさせたものであるが、今はスツカリ モダンな町となつて建築や街路なども立派になつてゐる。そんなことを P 君と 語り々々行くうちに天文臺に着いた。

すぐ、臺長室に案内せられ、V. M. Slipper 臺長と挨拶する。臺長とは去月シカゴの學會で會つておいたので、一別以來、東部の旅行の 話など一通りした後、自分は「最近十年間の天文臺の新しい構へや變化など 拜見したいものです」と言ふと、臺長は “All right !” と答へながら、すぐ隣りの寫眞比較

鏡室に自分を案内し、ちょうど其所に働いてゐる“Mr. Tombough”に紹介された。トムボ―君とは、言ふまでもなく冥王星の発見者である。冥王星と共に、トムボ―君が現今のローエル天文臺の最大の誇りであるのに異議はない。自分はトムボ―君の手を始めて握り、(星の発見後、三年も経た今日ではあるが)「御成功御めでたう！」と御祝ひを述べると、一見、粗野な容貌をした此の青年天文家は、いかにも純朴な態度で挨拶に答へながら、『御覧に入れませう』と、獨り呑み込みながら、今まで比較鏡に乗せてあつた大型の寫眞原板を外して、右側の棚の中から更に一枚の原板を取り出し、比較鏡にかけ、



ローエル天文臺長室の北窓より

目じるしのあるあたりに微かな星縁の一つを調整して、『どうぞ此れを御覧下さい』と自分をさし兼ねく。自分は直ぐ比較鏡の中を覗き込みながら、『之れは何星ですか?』を聞くと、『Pluto です。1930年の1月23日の原板です』との答へである。ト君の全く無造作な中にも、いかにもアメリカ青年らしいアツサリこだはらない態度が嬉しかつた。此の歴史的な宇宙的な document を、何の誇り氣もなく人に見せて、共に悦ぶ様子が甚だ自然である。——それから二つ三つ、小遊星などの寫眞を見せられた

後、臺長は自分を屋外に連れ出し、本館から五六十メートル離れた小觀測室内の Lawrence Lowell telescope を見せられた。之れが、トムボ―君に使用された、冥王星を発見させた望遠鏡である。口径は33糎(13吋)、焦點距離は其れの約5倍で、三枚玉の廣角カメラで、Harvard大學總長 L. Lowell 博士(初代の天文臺長 Percival Lowell 博士の弟)から此の天文臺へ1929年に寄贈された逸物である。

それから、一旦、本館へ歸り、臺長のすゝめにより、P 君に連れられて町の或 Restaurant へ午餐に案内された後、再び天文臺へ戻り、こんどは Lampland 博士に紹介された。Lampland 氏は次席の臺員で、有名な天體寫眞家であるが、十年前には、氏が旅行中で、自分は會ひ得なかつた人である。こんど幸ひに氏に紹介されたが、氏は又、前記の比較鏡室に自分を導いて、氏が1923年以來研究を續けてゐる所謂「變光星霧」や、又、M 81中にある新星の原板など興味深いものを見せられた。次に、Lampland氏は屋外へ自分を案内して、口径 100 糎（40吋）の大反射望遠鏡を見せられた。之れも十年前の自分は、時間不足のため、見なかつたものである。

最後に、臺長は自分を口径60糎（24吋）の大屈折機室に案内し、恆星のスペクトル寫眞撮影装置や、又、大遊星の寫眞装置などを説明された。此等のものは以前にも見せられたものであつたが、勿論、細部には可なりの改良も施されてゐるから、興味深かつた。

（ 37 ）

Lowell 天文臺を隈なく見せて貰つて、すつかり満足した自分は、15時半頃、臺長に深く好意を謝しつゝ別れを告げ、又々 P 君の車に送られて、停車場に歸り、15時47分發の汽車に乗つて西行した。

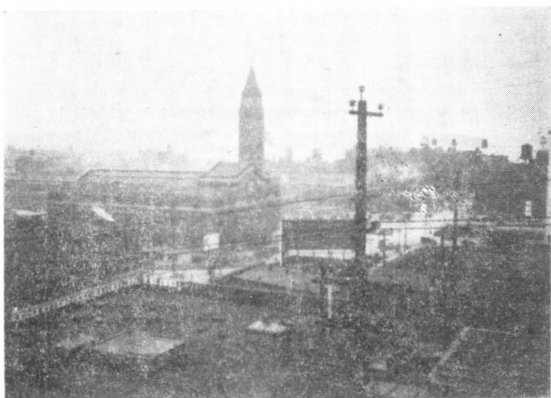
相變らず沙漠や避村の間を車は走りつゞける。流石はアリゾナの高原で、日は暮れに迫つても、暑さは加はるばかり。夜半頃、或る Junction 驛に15分ばかり停車したので、涼をとるため車から下りて platform を散歩して見たが、氣溫は車中よりも寧ろ暑いのは驚いた！ 地圖を見ると、此所は最早やアリゾナ州とカリフオニヤ州との境界に近く、所謂 Imperial Valley も遠くない所なので、暑さが甚だしいのは止むを得ないのだろう。

（ 38 ）

翌19日未明、眠られぬ車中で、ウトウトとまどろんだかと思ふと、ふと眼がさめて俄かに心地よい涼氣を覺えたので、窓外を見ると、未だ空には星の光が残つてゐる朝の霧の中から、カリフオニヤの果樹園の景色が現はれた。氣溫もスツカリ降つて、誠にすがすがしい。San Bernardino, Riverside など、昔なじみの此のあたりの朝景色を、夢の如き記憶と共にたどりつゝ走るうち、

早くも大 Los Angeles 市の地域に汽車は入り込んで、6時30分に Santa Fé 線の停車場に着いた。驛では小葉竹、鶴浦其の他の人々に迎えられ、取りあへず Miyako Hotel のバラに入る。

朝食後、Hotelの内外を、落ち付いた気持ちで見まはる。ロスアングレスの日本街も、外観と内容と、共に此の十年間に、著しく變つたものだ。昔しは可なり田舎じみてゐた此所あたりも、今は殆んど總ての家屋が改築



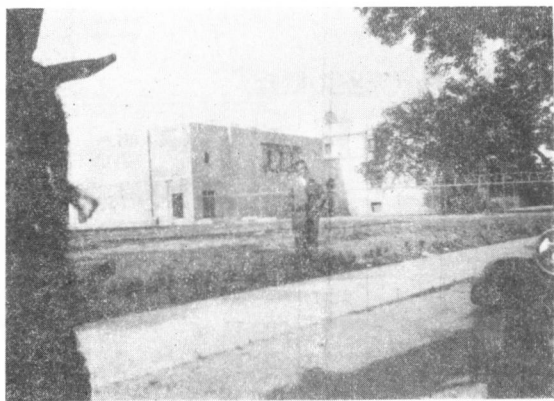
ホテルよりロスアングレス市日本人街を見る

されたらしく、これならば白人街と比べて殆んど見劣りがしないやうに思ふ。——小葉竹氏等と久しぶりで話す。自分は今は急行にアメリカの大都市殆んど全部を見まはつて、加州まで来たわけであるが、日本を出る時から多少の不安を持つて期待してゐた現下の國際狀態に源因する不愉快な思ひを、少しも經驗せずに来たので、何だかアメリカを見誤つてゐるのではないか!？」とさへ氣味悪く思つてゐたのであるが、今ロスアングレスまで来て、小葉竹氏等から聞かされた貴い suggestion により、自分の觀察が大に誤つてゐたわけではなく、實はアメリカ自身が今年の春以來著しく變化轉向しつつあるのだといふ事が認められた。意外ではあるが、アメリカのアメリカらしい點を、今更感ずる。

( 39 )

七月19日午前中はホテルで休養。正午は合同教會の徳牧師の午餐に招かれ、其の後、同帥の車に送られて、なつかしいバサデナ市の Mt. Wilson 天文臺研究所を訪ねる。昔、きれいであつたバ市の中心部あたりが、尙ほ更に美しくなつて、眼を驚かす。N. Lake 街を北行し、Sta. Barbara 街の研究所あたりは思ひ出多い場所であるが、此の邊は餘り變つてゐない。研究所で、直ちに臺

長 W. S. Adams 博士を訪ね、バンクーバーやシカゴ以来の旅中の事など話した後、マデソンの J. Stebbins 博士が目下此の研究所に来てゐるといふので、連れられて久しぶりで面會。此の博士も一昔前に比べて、流石に老境に入つたらしい風采に見えるが、いつも自分の顔を見ると、1922年の末、ボストン行の途中、ミシガン中央線の列車の中で初對面した時の事を言はれる。あの



加州工科學院(人は長田氏)

時の印象がよほど深かつたものと見える。博士は此頃キルソン山でやつてゐる宇宙空間の光線吸収に關する觀測結果など話された。自分は思ひ出すまいに、關西學院の菊地教授のことなども話した。

キルソン山天文臺研

究所では、ジョイ氏にも會ひ、又、臺長 アダムス氏には、明日再訪の節、アングダソン氏とヘール氏とに會ひたい希望を言ひ残して、研究所を出た。徳師は先きに歸られたので、自分は此のバサデナの住宅街の木蔭涼しいあたりを暫く散歩し、Bowen Court の St. John 氏宅を訪ねたが、隣り人は「一寸外出されたらしい」と言はれて、不在。止むなくダウントウンの盛況を一瞥した後、S. P. 電車でロスアンゲレスの宿へ歸る。

#### ( 40 )

19日18時、ロ市東一街の三光樓で自分のために歡迎會が開かれ、有志者20人ばかりに御目にかゝつた。此の席へ、わざわざ Brawley から來られた長田政二氏が見えたので、思ひがけない大喜び！ 來集者一同にも此の有名なアストロノマを紹介し、談笑に長い時間を費した。長田氏は又、わが天文協會の歴史や現状を一同に語られ、多くの入會者を勧誘せられた。

此の夕、20時から當市日本人基教聯盟の主催で、メソヂスト教會堂に於ひて Devotional Meeting あり、自分は招かれて簡単な感話をし、祈りの後、21時過ぎ、送られてホテルに歸つた。(つづく)